

近代殖産興業政策の 展開と博覧会参加

博覧会・塩業界・経営主体

The Expansion of the Modern Industrial Development Policy and Participation
in the Exposition: Expositions, the Salt Industry, and Management Entities

落合 功

OCHIAI Ko

はじめに

①内国勸業博覧会の開催

②第二回内国勸業博覧会

③水産博覧会の開催

④第三回内国勸業博覧会

⑤水産共進会・水産品評会の

開催と塩業界

⑥第四回内国勸業博覧会

⑦第二回水産博覧会

⑧第五回内国勸業博覧会

おわりに

【論文要旨】

本論は、明治期に開催された内国勸業博覧会、水産博覧会、水産品評会、共進会など、各種博覧会に焦点を当て、博覧会政策が殖産興業に与えた成果と限界を明らかにするものである。

具体的には、これまでの博覧会研究は、博覧会そのものにスポットが当てられていたのに対し、本論では塩の出品、塩業界の動向に注目し、具体的に博覧会参加の意味や歴史的評価を示すものである。

明治前期における塩業界の課題は、品質改良と増産であった。近代産業として登場する化学工業の原料塩として、漁獲物の清国輸出の塩蔵用として、塩の品質改良は不可避であった。しかし、実際には苦汁分を含んだ差塩の方が国内市場のニーズは高く、漸進的な品質改良しか見られない。増産においても、むしろ製塩量が少ない方が高く売れ、経営的にも高い利益があがるため、期待通りの成果は得られなかった。

博覧会では、天日塩田や流動式・枝篠架式塩田など革新的な製塩法も提示されることがあったが、実際には実用化には至らず、技術的にも漸進的な進歩にとどまっている。結局、政府としても、出品物に対する評価を下し、課題を提示することはあっても、実際に製塩業に採用するのは塩業者個々に委ねられていたのである。また、博覧会開催前に明示された「博覧会規則」や「出品人心得」などによって、展示の意図が明示されているため、自主性や独創性よりも、特定課題に回答を示すことが高評価を得ることとなり、結果、内容の標準化は目指せるが独自性は消されていく。この点が、博覧会政策の成果と限界といえるだろう。

また、博覧会開催にあわせて水産諮問会を開催している。出品展示とは別に、製塩業者のみならず、問屋などの販売店、官僚などが集まり、業界の発展を展望する意見交換の場になっている。

【キーワード】内国勸業博覧会、塩業界、水産博覧会、野崎武吉郎、大日本塩業協会